

ライマン雑記(15)

副見 恭子¹⁾

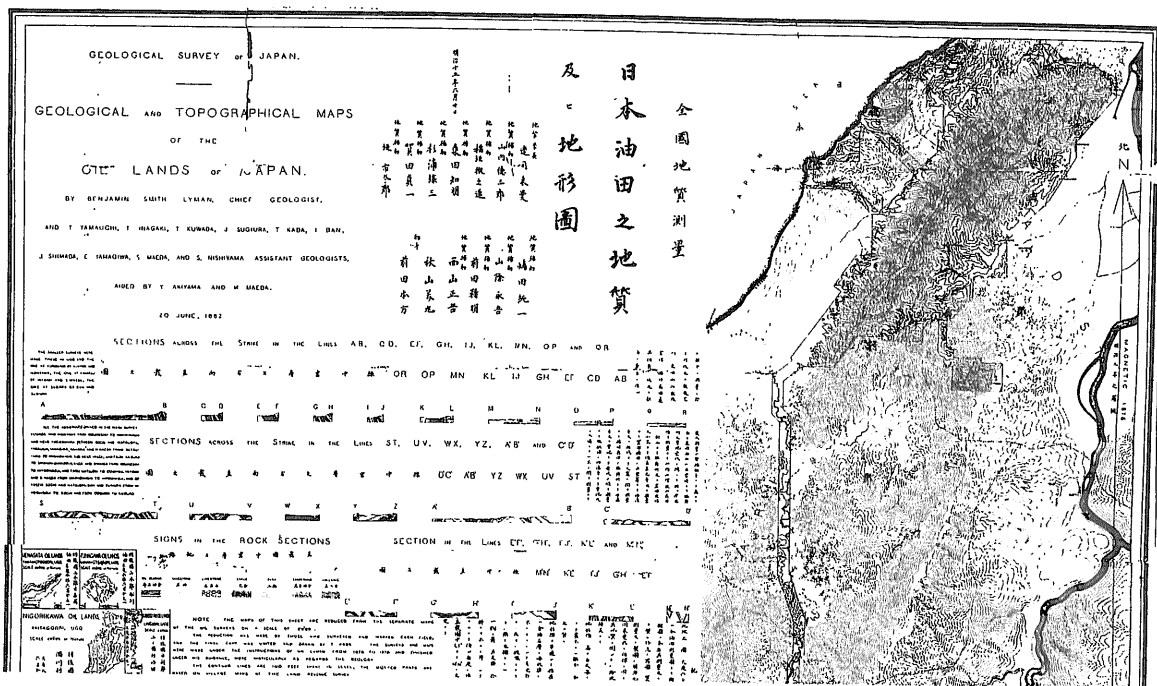
ライマンと助手たちⅣ

賀田貞一

1. 賀田貞一の生涯

「文は人なり」と言うが地図はどうだろうか。家族写真で見る賀田貞一は厳格にして格式を重んじる明治男の印象が強いが、彼の手がけた精密な「日本油田之地質及ヒ地形図」(第1図)を熟覧すると、鋭い感受性とデリケートな感性が伝ってくるのを感じるの、筆者のみではあるまい。しかし賀田の人柄に触れたのは、明治15年(1882)ペンシルベニア州地質測量の一員となって辛苦を味わった折に、ライマンへ書いた数多の手紙のおかげである。

賀田貞一は長州の産で、父は毛利家に仕えた藩士だった。幼少より藩校で勉強し、明治元年沼津で西周^{あまね}に就いて英語を学んだ。のち慶応義塾^{けいおん}に入って研鑽^{けんざん}を積んでいる。彼は明治初期の啓蒙思想界の重鎮西と福沢諭吉に師事し、基本的人権・自由と平等の思想を受けた先覚者であった。明治5年開拓使仮学校に入学し、翌6年23歳でライマンの第1回北海道地質測量調査に加わった。明治9年ライマンが内務省に移り全国石油調査の命を受けると、彼も助手として参加し、実測地図の制作・石油調査とその地質技術を磨いた。明治15年ライマンの「日本油田之地質及ヒ地形図」完成のため工部省鉱山局を辞し、私費で渡米した。マサチュ



第1図 日本油田之地質及ヒ地形図(マサチューセッツ大学図書館蔵)。

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員：
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U.S.A.

キーワード：ライマン, 賀田貞一, ライマン家

ーセッツ州・ノースハンプトンのライマン邸に約4ヵ月滞在しそれを完成後、7月にライマンの世話でペンシルベニア州第2次地質測量隊の一員として、調査地ポッツビルで主に地図作製に従事した。暇をみてはノースハンプトンのライマンへ、悩みや喜びを書き送った手紙が現存する。

翌16年4月帰国。間もなく工部省鉱山局へ再任され、九州・沖縄の鉱山調査や地質図出版と多忙なかわら、日本鉱業会設立の発起人になって活躍した。明治18年(1885)三井物産会社囑託として民間入りし、日本は元より韓国・中国で数々の地質調査を行い、文字通り日本人によつての東洋地質調査の実施というライマンの夢を実現させた。賀田は炭鉱事業一筋に生きた。惜しいかな大正4年(1915)突如倒れ、64年の生涯を終えた。

2. 平河町5丁目17番地

ライマン離日、明治13年(1880)初秋、山内徳三郎はライマンに平河屋敷管理の後継者に賀田貞一を勧めて、北海道の任地へ旅立った。ライマン平河邸は、「ライマン雑記(4)」で述べたように、広大で、地坪1,099坪、20室近くある平屋の建坪は138坪、それに長屋が附属していた。ライマンは特に日本庭園作りに力を注ぎ、梅・桜・藤・百日紅・菊・竹等一年中楽しめるように植木や草花を植え、さらに故郷を偲びリンゴやイチゴを試作した。

この屋敷で江戸っ子生活三昧に明け暮れた様子が、家計簿にうかがうことができる。義太夫語り座料 3円、上野博覧会内茶代 5銭、箱庭用人形 3円21銭、石燈ろう1本 4円50銭、びわひき ことひき 12人 20円50銭、落語家桂文治 8円、あやつり人形 11円と様々な明治文化が眼前に展開する思いがする。大森貝塚発見者で有名なエドワード・S・モースは、この「ことひき」と「びわひき」のスケッチを「日本その日その日」(注1)(第2図)にのせている。モースがライマン平河邸に招かれた折描いた大ざっぱながら、特徴をうまく捕らえたスケッチは、家計簿では想像できない立体的な雰囲気をかもしだし、弦の音まで聞こえてくるようだ。なお、モースはライマンから珍しい貝塚と石棺のことを聞き、熊本県大野村へ足を運んでいるが、この時に聞いた話ではなかろうか。モースの貝塚研究への熱意はさることながら、知日家ライマンが惜しげ

122

JAPAN DAY BY DAY

The various musical instruments figured have all been derived from China originally, coming through Korea. The group of dancing children we had seen before at a tea-house some months ago, and when we came into another room from dinner they looked surprised and delighted and rushed to us, and we were pleased to see them. Their ages were three, four, five, and six. There were two attendants. Figure 530 gives an idea of them. The samisen player is shown in figure 531.



Fig. 531

The boys' dress, with its obi and long sleeves, resembles a girl's dress, and it takes some time to distinguish the sexes, though, of course, the hair instantly betrays the difference. The hakama is a kind of divided skirt with a stiffened apen-



Fig. 528

第2図 びわひき ことひき(Japan day by dayより)。

なく在留外国人に日本に関する情報を提供した事実は、特筆すべきであろう。科学関係の人々だけでなく、他の分野にも及び、ウィリアム・アストン、バシル・チェンバレン、アーネスト・フェノロサ等の著名人にまで及んでいる。

平河町屋敷の門の両側に門前長屋と呼ぶ2軒の建物があり、右側が5畳と6畳で、賀田貞一と島田純一が住み、馬屋がある左側の長屋にはコックの秋葉幸太郎、別当の中嶋竹二郎、門番等が家族と共に居住していた。ライマンは使用人の子供達を学校へやり、端午の節句やひなまつりを祝い家庭的な雰囲気を作った。家計簿の「賀田細君 筆墨 7銭4厘・別当・亀吉・小供三人分 墨筆 10銭5厘」の記述から、書家得所先生が来訪すると、ライマンの督励のもと、子供達を交えた長屋の人々が勢揃いして書道に励む姿が目につく。稽古に精を出す子供三人の中に、ノースハンプトンで育てられた別当の息子中嶋徳松の姿があったに違いない。

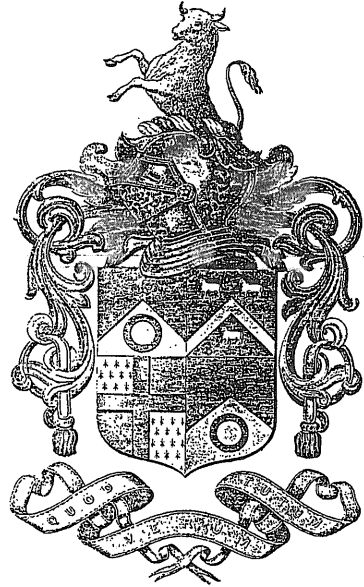
ライマンがいよいよ日本を立つ12月22日の朝、助手と使用人たちは横浜グランドホテルに集った。その際に家具を含む平河町屋敷を、ライマンが設立した地質学社へ寄付する要旨をしたためた手紙

を賀田に手渡した。日本地質学を世界的レベルにするために、地質学社に日本は勿論、世界の資料を集めライブラリーを設けるのが彼の念願であった。

残念ながら、ライマン書簡コピー綴りの1880年1月10日から1882年4月4日までの手紙がすっかり白紙に変じているので、約15ヵ月のライマンと助手たちの動静は不明であるが、他の資料から、「日本油田之地質及ヒ地形図」を仕上げるため、賀田貞一が、ライマンの別当だった中嶋竹二郎の息子徳松を伴ってノースハンプトンに1882年3月16日に到着したのが判明した。当時トク(徳松)は9歳であったがその後ライマン家で働きながら小学校から大学までの教育を受け、29歳でノースハンプトンで劇的な生涯を閉じた。彼がこよなく愛したノースハンプトンとは一体どんな町だったのだろうか。

3. ノースハンプトン

ノースハンプトンを語る前に、ライマン家を知る必要がある。「ニューイングランド家紋章」に、1631年アメリカの土を踏んだリチャード・ライマンは、アルフレッド大王(849-901)から24代目ヘンリー・L(ライマン)の息子とある。またライマンが来日する1年前、1872年に出版された523ページの分厚な本「ライマン家家系」(注2)(第3図)は、ライマン家がノルマン朝(1066-1154)初期の土地台帳に載っている由緒ある家柄と述べている。メーフラワー号が1620年初めてアメリカ大陸に到着してより11年後の1631年8月に、リチャード・ライマンは富貴な生活を捨てて、家族と共に英国プリストル港からアメリカへ出帆した。船客約60名、ニューイングランド知事夫人および息子一家と乗船し、航海約10週間目の11月4日、ボストンに上陸、7砲門の礼砲で迎えられた。ボストン湾に近いチャールスタウンに住むこと約4年、再び新天地を求めて、家族と希望者約100名、牛160頭を引き連れて南西へ移動し、現在のコネチカット州ハートフォードに達し、そこで開拓地を建設した。リチャード・ライマンが如何に進取の気性に富んだ冒険家でいたかがうかがわれる。勇気と冒険心はライマン家の伝統であったが、勇猛果敢な彼らは一方では定着すると、学問と教養に精進し人格形成に努めた。1872年に於いて、ライマン一門のエル、ハーバート・アマースト大学



第3図 ライマン家紋章(ライマン家家系より)。

等の卒業者の数は93名で、ボストン市長・教会創建者・独立戦争に武勲を立てた軍人・判事・聖職者と数多くの時の指導者を輩出した。家訓の「高潔」を旨としたせいも、権力者は無く、人望の厚かった人々が多い。

1653年ハートフォードからコネチカット川に沿って北上する一隊があった。果てしなく続く荒野、インディアンや野獣の急襲の不安、何時変わるかも知れない天候にもめげず、若者達は豊かな開墾地を求めて進んだ。なだらかな連峰に囲まれた盆地を流れる川に沿って行くと、広い沖積平野が現れた。肥沃な土壌は耕地に適し、水々しい草地は家畜を飼育するのに最適だった。何よりも山紫水明な土地が彼等の心を奪った。ノースハンプトンと名付け、すばらしい発見を神に感謝した。この最初の移住者たちの中に、二代目リチャードとジョン・ライマンの名がある。

早速開拓者たちは開墾に努めた。間もなく家が並び、川に橋がかかり、教会や学校が町の中心に建てられた。度々インディアンの襲撃に会い、村中で団結して彼らの侵入を防衛した。ノースハンプトンは駅馬車がボストンからやって来る頃には、マサチューセッツ州西部の教育文化の中心地になっていた。町の住民は清教主義を旨とし、勤勉で個人の自由を尊び、中産階級ヤンキーを主体に平和な

日々を送っていた。

1841年ライマンが6歳の時大事件が起り、街中が騒然となった。産業革命の落とし子、ロバート・オーエンの空想社会主義を本にした「The Northampton Association of Education and Industry」、即ちノースハンプトン教育工業組合が創設され、全米の人々の注目の的となった。町の有志が絹糸紡績工場を買入れ、労働者のため、教育・食堂・衛生等の福祉施設を整えた。19世紀の中頃に斬新な試みが行われたのだ。1846年雇主の破産で組合が解散したが、ともかくユニークなアイデアが実現できたのは、ノースハンプトンの民度の高さを示すものと言えよう。

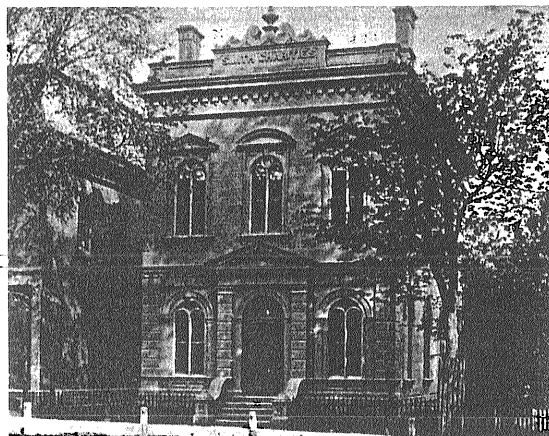
少年時代にライマンはもう一つ革命的な事件を見聞きしている。これはライマンの母方のスミス家で起っただけに身近に感じ、終生彼の意識の中に生きていたと思う。

ライマンの母アルマイアの叔父オリバー・スミスは、1766年ノースハンプトンから北へ数マイルにあるハットフィールドの農家に生れた。アメリカの名門校スミス大学創始者ソフィア・スミスは彼の姪にあたる。彼は旧家の6人息子の末っ子で、やがて実業家となり、投資で巨万の富を築いた。彼だけが独身を通したので、1845年に80歳で死去した時、彼の財産への親戚の期待が大きかった。しかし彼の遺書で大部分の財産がスミスチャリティズと呼ぶ慈善事業の基金になると知ると、彼らは最初は耳を疑い、驚愕し、やがて怒りに変わった。オリバー・スミスは遺書を書いては直し、13年かけて慎重に作成した。

スミスチャリティズとは現在で言えば社会福祉事業で、4千万ドルを基金にして、ノースハンプトンを含む8町村の貧困な少年少女、若い女性や未亡人を救済するよう、遺書に詳細な項目を列挙している。

激怒した親戚は、1846年2月遺書無効を訴え法廷で争った。被告は遺書連署人と8町村の内の6町村、原告はライマンの父母を含む親戚で、両側共当時マサチューセッツ州で最も腕利きの弁護士を雇い、法廷で火花を散らした。1847年原告敗訴が決まり、スミスチャリティズは慈善事業の草分けとなった。

余談だが、執筆中、ふとスミスチャリティズが今



第4図 Smith Charities building (Historic Northampton 蔵)。

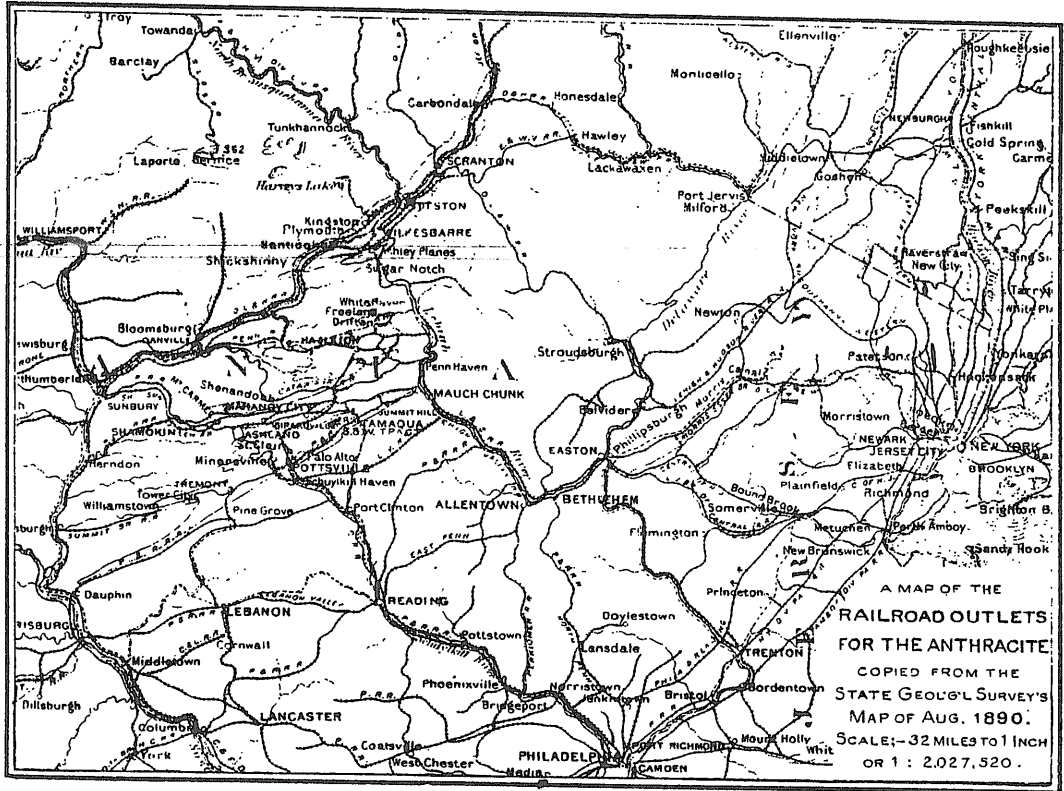
も存在するかと電話帳をみると、Smith Charitiesとある。後日訪問すると、1886年に新しく再築されたビルが銀行のように厳めしく立ち、周囲の近代的な建物とちぐはぐな感じだった(第4図)。ライマンは町の中心に出る度に、このビルを眺めたであろう。彼が終生弱者の味方だったのが、何となく納得できる。オリバー・スミスの善意は21世紀へ受け継がれていく。

4. 第2次ペンシルベニア地質調査

早春からノースハンプトンは新緑の候となり、「日本油田之地質及ヒ地形図」の仕上がるめどが立つと、ライマンは、伯父である第2次ペンシルベニア地質調査長 J. P. レスリーに賀田貞一を雇ってくださるように頼んだ。彼の地形測量図の精密さをほめ、日本人の地質制作者の中では希れな存在だと付け足した。

7月16日賀田はライマンに連れられて、第2次ペンシルベニア地質調査事務所があるフィラデルフィアに着いた。数年前まで羽織・袴・畳と障子の生活をしてきた少軀の賀田が、マーケット・ストリートの駅に下り、煙突が立つ赤レンガの家が果てしなく続く壮大なパノラマを目にした時、アメリカ文化の威圧を感じたに違いない。しかし言葉や習慣のハンディにもかかわらず、彼は約8ヵ月間地質調査の仕事を堂々とやり通した。

第2次ペンシルベニア地質調査は、アメリカならではのたくましさがある。ペンシルベニア州が、1874年に第2次地質調査を許可し、J. ピーター・レ



第5図 ポツビルを含む炭鉱地帯 (Shippen and Wetherill tractより)(注3).

スリーを地質調査長に任命してから、なんと延々20年程続いた。即ち1893年にレスリーが激務で倒れ再起不能になるまで、不況になろうと、石油ブームが起ろうと、毎年州議会で地質調査費が通過した。これはひとえに彼の人格、手腕、努力に負うところが大きい。

賀田貞一は1882年7月から翌年2月まで、8ヵ月近く、主に無煙炭地質調査の中心地ポツビルで過ごした。彼が7月末ノースハンプトンのライマンへ送った第一信によると、北海道とは桁外れの大炭鉱の見学や地形地図の仕事に追われ、多忙な毎日を送っていた。緑に囲まれた赤レンガのライマン邸、澄んだ池、親切な町の人たちをしばしば思い出したらしい。荒々しい炭坑町に馴染めず、不安と孤独な賀田を感じる。3ヵ月間無煙炭地方に留り、10月にはノースハンプトンに戻って、ライマンの庭作りを手伝い、翌年2月にニューヨークを立ち、ヨーロッパ廻りで帰国するのが賀田のプランだった。その間高橋ニューヨーク領事を仲介に、日本政府が「日本油田地質及ヒ地形図」を出版するかどうか、

大鳥圭介の返事を待つ重大な任務があった。

ところが10月末になると、地質調査主任でレスリーの俊敏な愛弟子チャールズ・アシュバーナーに賀田は能力と人柄を買われ、仕事が増え、ノースハンプトン行きは延期となった。彼の仕事が高く評価され、主任と親しくなる内に、賀田は長く滞在しようかと思ひ始めた。12月17日付のライマンの手紙で「一介の日本人があなたのおかげで第2次ペンシルベニア地質調査の一員になり、あなたに教わった技術を生かし、ともかくちゃんと仕事をやってきた。ペンシルベニア東部無煙炭鉱の隅から隅まで視察したし、豊富な知識も得た。本当に幸福である」と喜びを表した。一方賀田は留るべきか、日本に帰るべきか悩んだ。「仕事を続けている内、ミスターライマンの助手がこんな仕事を仕出かしたと言われる事が起るかも知れない。絶頂に達する前に辞した方がよいと思う。目前のおいしい菓子を皆食べないで、飽食する前に菓子から離れ、次の機会を待つのが賢明ではないだろうか。日本で幸運に恵まれるかどうか判らないが、帰国した方が良



第6図 賀田貞一と家族(マサチューセッツ大学図書館蔵)。

いではなかろうか。もしあなたが反対しないのなら、1月末でここを辞し、ノースハンプトンへ行き一緒に庭園作りを完成した後、日本へ帰りたい。」賀田は文字通り幸福の頂点に達しつつあった。明けて1883年1月3日「ライマンの意見に従い滞在を延ばすことに決めた。」と賀田はライマンへ返事を書いた。翌日急転し不幸な事件が起った。

「自殺したいが、あなた(ライマン：筆者注)に迷惑がかかるのでできない。しかし、あなたに会わずすぐ帰国する」1883年1月4日と5日付の手紙が1882年になっている、最初の手紙は支離滅裂、精神錯乱中ペンをとったのではないと思われるほどである。数回読み返し、彼の真意を考えると、アシュバーナーに高圧的に出られ、ライマンの意見に反し、月25ドルの低額で滞在する条件を受諾してしまったのだ。彼はライマンへの背信行為への自責と自分の愚行を省みて、ももんとした。しかしそれだけではないと思う。ライマンの増給を要求せよとのアメリカ的な助言と金銭に拘泥してはならない武士の誇りの板挟みになった苦悶とも言えるのではなかろうか。

翌6日、賀田は前日の受諾を撤回した。平静な心に戻った彼は、即刻帰国の愚挙を取り消し、ライマンへ手紙を再び認めた。「アシュバーナーは、私の交渉目的がお金にあるとみたらしい。私は6ヵ月50ドルで十分に暮せた。ここに滞在する目的は、地質調査の知識の獲得にある。どうして私はこうまで愚かだったのだろうか」彼はアシュバーナーの峻烈なやりとり屈辱を感じた。「無礼な行動を受けたが、彼の過去の親切は忘れはしまい。しかし彼の下ではもう働きたくない。これも私の英会話力の不足とホームシックによるのだ。憎むのは私以外の誰でもないのだ。何故5、6歳の少年のように愚かだったのかわからない」。このビジネスはビジネス、親切は親切と割り切るアメリカ文化と、面目を重んじる日本文化のギャップは、21世紀も近い現在でも、時々問題を起している。

アシュバーナーは賀田の真意が判り、彼の意志を尊重し撤回を受け、2月15日を賀田の勤めの最後の日とした。以後彼の妹(姉?)の結婚式に招待したり、安い下宿を世話したり賀田への親切な態度は変らなかった。

退職する3日前「あなたの成し遂げた仕事に全く満足した。貴重な助力を失うのは残念であり、個人的な交際も楽しかった。」と賀田を大いに称え、名残を惜しむアシュバーナーの手紙を受け取った。レスリーが頼りにした高弟アシュバーナーにこれ程まで称賛された賀田は、地質家としてさぞかし本懐を遂げた思いであっただろう。

州都ハリスバーグに出張中のアシュバーナーを待たずに、16日賀田はフィラデルフィアを離れた。「賀田は帰心矢の如しだった。私の娘は何時も彼の腕に抱かれるのを喜んだ。きっと娘が彼の帰国の思いを駆り立てたに相違ない」と後日アシュバーナーはライマンに述懐している。

最も賀田の帰国を惜しんだのはライマンだった。彼がノースハンプトンで数週間滞在した後、ニューヨークで過ごしていた時、ライマンは再びノースハンプトンに戻ってこないかと勧めた。3月17日計画していたヨーロッパ経由でなく、カナダを通りシカゴに出て、3月29日サンフランシスコから日本へ向った。

5. 絆

賀田は4月19日に日本の土を踏んだ。旅の疲れがとれると、早速親身になって面倒をみてくれた師ライマンへ「積善之家有餘慶」と漢字で書き、ライマンの地質調査方法が再評価され好評だと伝える手紙を送った。善行を積んだ人に、その功德の報いとして思いがけない喜びがもたらされるの意味で、ライマンの功績が改めて認められた賀田の喜びが、満ちあふれる。

二人の文通は賀田が没するまで続いた。ライマンはポッツビルの石炭、自分の所有する炭鉱やノースハンプトンの近況等、昔赤レンガの家のベランダで彼と話し合ったように、楽しんでペンを走らせた。

1915年晩秋、ライマンは賀田立二から英文で書かれた短い手紙を受け取った。

今日(大正4年11月29日)3時半過ぎ突如敬慕する父賀田貞一が死去しました。どうか米国鉱業会およ

び父の友達に訃報をお伝え下さい。葬儀は多分12月1日水曜日午後麴町の寺で行われます。

深い悲しみの中で
賀田立二

少し前まで元気だった賀田の死に、家族の動揺は量り知れなかったであろう。「すぐにライマン先生に知らせなければ」とつぎに家族一同が思った。大任を引き受けた賀田立二は、父が思慕し、しばしば語ったライマン先生へ初めて書く責任と誇りを満身に感じながら、一字一字考えては英語で書いた。

前後して前田精明が死去し、ライマンは“ヤングメン”が年老いていくのを認識せざるをえなかった。賀田の悲報を受け、81歳の彼は、「日本油田之地質及ヒ地形図」製作のためにノースハンプトンにやって来た若かりし賀田を思い出した。ずっと昔のようでも、数年前のようにも思えた。同伴した幼かった中嶋徳松は、14年前に夭折していた。アシュバーナーが激賞したKada、骨の髄までサムライだったKada、帰国後、北は樺太・北海道、南は琉球、そして支那、朝鮮の地質調査と活躍し、自分の望みをかなえてくれたKada……追想している中、彼を失った悲しみが胸に迫った。明治誕生と共に主君を失ったヤングメンは、ライマンを心の支えとした。しかし、帝国議会の開設、日清・日露戦争を経て日本は近代国家となった。やがてはヤングメンの武士道の終焉がやってくるだろうと思ひめぐらす内に、彼の哀悼は益々深まって行った。

注1) Morse, Edward S. (1917): Japan day by day; 1887, 1878-79, 1882-83. Boston, Houghton, p. 122-123.

注2) Coleman, Lyman (1872): Genealogy of the Lyman family in Great Britain and America. Albany, J. Munsell, State Street.

注3) Lyman, Benjamin Smith (1893): Shippen and Wetherill tract. Philadelphia, Sherman.

FUKUMI Yasuko (1998): A note on Lyman (15)- Lyman and his assistants IV.

<受付1998年2月20日>